日本ペンクラブ三十年史

社団法人　日本ペンクラブ

日本ペンクラブ三十年史

社団法人　日本ペンクラブ

日本ペンクラブ三十年史 1967 ©

1967年3月20日印刷
1967年3月31日発行

発行者 田村 泰次郎

発行所 社団法人 日本ペンクラブ
東京都千代田区有楽町2-3 朝日新聞東京本社新館8階
電話 (201) 5925・5926

製作 中央公論事業出版
東京都千代田区丸ノ内丸ビル5階 (201) 1121～3, 2843

印刷 大日本印刷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

川端康成

日本ペンクラブは「三十年史」の出版にあたって、その三十年の業績と発展とを、自祝してもいいと思う。すでに軍国のおさえのもとに生れて、忍び、戦争の嵐のなかに消されたが、戦後に早く再建を見た。そして、文化団体としては、先んじて、国際間に復帰を認められた。やがて、アジアで初めての、国際ペン東京大会を成功させることができた。今日、日本ペンクラブは、世界各地のセンタアのうちでも、活潑な重要なセンタアの一つである。政治的の立場も、自由、中正を保っている。

そうあり得たのは、会員文学者の力だけではなく、戦後の日本のありよう、また広い助けによった。国際大会開催にたいする各方面の支援なども、他国に例を見ないほどで、後々の語草とのこるほどの盛会となった。また、その国の文学者をこれほど洩れなく会員に含めているペン・センタアは、世界にもないか、ほとんどないかのようである。

国際ペンは第一次大戦後の創建からして、ヨオロッパを中心として来たが、世界の広域にわたろうと

する動きにつれて、遠東の日本ペンの存在は重みを加える。また、国際間の相互理解、文化交流を進めるにつけても、日本はまだ知られない国であるところに、西洋のセンタアとはおのずからちがう、日本ペンの意味があろう。日本文学の研究紹介も、敗戦から今日、諸外国に少しずつ興りつつあるのは、日本ペンの歩みを促すものであろう。

この「三十年史」が、そうした日本ペンクラブの歴程と現状とのあらましを伝えて、多くの賛助者や会員への感謝のしるしとなれば幸いである。この書にもユネスコ国内委員会の支援があった。また、執筆者の労をいとわぬ協力があった。

昭和四十二年三月

まえがき

わが日本ペンクラブは昨年（昭和四十一年）の秋、創立三十周年を迎えた。

三十周年を祝うにあたって、日本ペンクラブの三十年の歩みを回顧し、その将来に想いをいたした時、みな期せずして、記念として三十年史を編纂したいと、等しく考えた。恐らく、歴史の上に例のないほど艱難の多かった三十年の記憶が、同じ想いをおこさせたのであろう。創立にあたって力を尽された人人は、島崎初代会長はじめすでになく、支那事変から太平洋戦争にかけて苦闘した記憶も、その人々とともに消えようとしていることを、憂えたからでもあろう。そればかりでなく、敗戦後の混乱期に、わがペンクラブを再建した人々のなかにも、世を去った者が多く、今記録にとどめなければ、再建当時のことさえ忘れ去られることを、想ったからでもあろう。

実際、第二十九回国際ペン大会を昭和三十二年に、東京で開催するにあたって、川端前会長の心労の多かったご努力や、当日諸外国から集った文学者に非常な感銘を与えた開会式の言葉など、ややもすれ

ば忘れがちであるが、三十年史を編纂することで、改めてペンクラブの設立の精神を思いおこすとともに、その活動の伝統をたどることは、わがペンクラブの明日のために、大切なことであると、みな一致した意見であった。

三十年史を編纂するといっても、資料が少なく、とくに最初の十年間の資料は、戦災その他によってすべて消失して、手もとになく、困難をきわめた。三十年史の執筆は、会員の瀬沼茂樹氏と野口富士男氏とに依頼した。瀬沼氏には第一部として、ロンドンにある国際ペンクラブの歴史を、野口氏には第二部の日本ペンクラブの歴史を依頼したが、両氏とも繁忙な折にも拘わらず、困難な仕事を引き受けられて、実にみごとな「作品」を完成せられた。感謝にたえない。

折角苦心して編纂した三十年史であるから、これを印刷にして、会員ばかりでなく一般に頒布して、ペンクラブの運動に関し理解をこいたいと、希ったのも、自然なことであるが、ユネスコ国内委員会のご援助によって、この希望をみたすことのできたのは、全くしあわせなことで、感謝をささげたい。

最後に、資料の収集その他について、多くの方々のご助力を受けた。特に島崎静子夫人からは秘蔵の写真帖をお貸しいただいた。ご厚情に対して、ここに心からお礼を申し上げたい。

昭和四十二年三月

芹沢光治良

日本ペンクラブ三十年史　目次

序　川端康成
まえがき　芹沢光治良
第一部　国際ペンの成立と発展　瀬沼茂樹　三
第二部　日本ペンクラブ三十年史　野口富士男　五一
第一章　戦前の日本ペンクラブ……五三
1　創立の背後事情　2　発会式　3　クラブの運営　4　第十四回国際ペン大会　5　戦争の時代
第二章　敗戦から大会東京招致まで……一三九
1　焦土の中から　2　世界の一員　3　東京招致
第三章　東京大会から創立三十周年まで……二〇七
1　東京国際ペン大会　2　あらしの後　3　日本ペン創立三十周年
あとがき　立野信之　二五

日本ペンクラブ三十年史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部　国際ペンの成立と発展

瀬沼茂樹

一

国際ペンクラブは、今から約半世紀あまり昔に、その発端をもっている。各国のペンクラブのニュウズや会報には、この国際組織の創立者として、故C・A・ドウスン・スコットの名をしるし、永久に記念するのが例となっている。だから、国際ペンクラブの成立とその歴史をたどろうと思えば、まずこの組織の生みの親C・A・ドウスン・スコット女史のことから語るのが礼というものであろう。

キャザリン・エイミ・ドウスン（Catherine Amy Dawson）はイギリスの詩人で小説家であり、一八六五年にロンドン郊外のドゥルウィッチの宗教的に厳格な中流家庭に生まれた。二十二歳の時に生家をとびだしてロンドンに移り、著述をもって身を立てた。処女作は一八八九年に出版された叙事詩『サフオ』であり、この作品から友人の間ではサフオの名で呼ばれていたが、ギリシャの女流抒情詩人の名にふさわしいほど、叙事詩や小説を多く書いた。

ドウスン嬢は一八九六年にスコット医師と結婚し、平凡な田舎医者の妻としてすごそうと、数年間努力してみたものの、あまりうまくゆかず、一九〇五年に小説を出したが、これは二十冊ほどある小説のうちの第一冊であった。第一次世界大戦がはじまると、一九一四年、スコット医師はフランスに派遣されスコット夫人もまた軍事に熱中して、女性の国土防衛隊の先駆といわれる“The Woman's Defence

Relief Corps”を組織した。しばらくして、若い無名の作家たちのために、すなわち「明日の作家」のために、「明日クラブ」（To-morrow Club）をつくり、既成作家たちに引きあわせることを考えた。有名作家も多くクラブにあつまり、その中には二歳年少の大作家のジョン・ゴオルズワアジ（John Galsworthy 1867—1933）がいた。このクラブの創設は一九一七年のことである。

一九二一年のこと、コオンウォル州の辺鄙な土地に滞在し、小説を書いているときに、彼女はふとペンの理想を心に思い浮べたという。すでに述べたように、世界大戦に良人を医師としてフランスに送り、みずからは軍事にしたがい、戦争と祖国とのためにつくしている間に、戦争の悲惨と恐怖とを、身にしみじみと味いしった。多くの同時代人のように戦争に対する悲哀と憎悪との念から、恐るべき大戦の悲劇を二度とくりかえしてはならぬと、確信するにいたった。この世界に欠けているものは友情と寛容であると悟った。そこで、ペンクラブのような国際組織をつくることこそ、この欠けている諸徳をやしない人種・宗教・政治を越えて、永遠の平和を実現することであると思いついた。

そこで、ロンドンに帰り、知人の作家を晩餐に招待することにした。ドウスン・スコット夫人は、女流文学のさかんなイギリス文壇にあって、どう贔負めにみても一流作家ということはできないし、またとくに女性としての魅力にとんだ人でもなかったようであるが、「明日クラブ」を通じてジョン・ゴオルズワアジをはじめ、イギリス文壇の作家たちに、いくらかの知人をもっていた。女史は友人たちに趣旨を説明し、援助をもとめた。国際連盟の理想の支持者であったジョン・ゴオルズワアジの協力がきわ

めて有力であった。作家たちを晩餐に招いて、計画を話し、協力をもとめるがよいと示唆してくれたのは、他ならぬ、ゴオルズワアジであったと伝えられている。

一九二一年十月五日の火曜日に、ロンドン西一区ルウパアト街五六番地にあるフロオレンス・レストランに晩餐会がひらかれた。集ってきた作家たちは四十名たらずであったが、初めての会合としては成功であった。後のことであるが、一九六五年十月五日に、ドウスン・スコット女史の生誕百周年記念の晩餐会がザ・カフェ・ロウヤルで催されたとき、最初の集会のメニュウが復原されて、レストランの写真入りの表紙とともにくばられたので人はこういう記念の仕方のあることを知ったが、当夜の晩餐ははりこんだものであったことがわかる。集った作家たちは趣旨に賛成する人たちばかりであったから、論議を重ね、会の名称を定めた。poets, playwrights のP、editors, essaysts のE、novelists のNをとって、P・E・Nと名づけ、筆のペンにかけた。ペンは剣より強しということを実をもってしめすのがクラブの趣旨の一つでもある。そして当時「フォーサイト・サガ」をもってイギリス文壇に名声の絶頂をきわめようとしていたジョン・ゴオルズワアジをもって会長と定めたのである。

ペン・クラブは創立の当初は食事の会ぐらいの規模にすぎなかった。しかし、ペンはもともと国際的な組織にまで発展しなければ、本来の意義を発揮できないものである。だからドウスン・スコットとゴオルズワアジとは協力して、ペンの精神をもってイギリスの仲間の作家たちを勧誘するばかりでなく、ひろく海外の作家にも働きかけようと心をくだいた。当初は毎月会員が集って、海外からの賓客があれ

ば、歓迎するという形で育成しはじめた。このクラブは国際的である点が初めから他のクラブとちがうところである。ドウスン・スコットとゴオルズワアジとはいっしょにヨオロッパの作家たちに呼びかけて、当初の目標を実現しようと、折あるごとに、努力を怠らずつとめていた。皮肉をとばすバアナアド・ショウも、さっそく賛成して助けてくれた。

一九二一年にノオベル賞を授けられたフランスの長老作家アナトオル・フランスは、日本流にいえば、もう喜寿をこえる老年であったが、あなたが動いてくれれば、ヨオロッパ中の作家が協力してくれるとせがまれた。アナトオル・フランスは、その思想的立場からいって、平和と博愛とを重んずる理想主義的信念からいって、ペンの理想を生きているような作家であったから、ゴオルズワアジの申出に賛成して、フランスだけではなく、広くヨオロッパ諸国に呼びかけ、国際的な組織にする運動がつづけられた。こういう話は、まだ他にあり、或いはアンリ・バルビュスと論戦し、真の平和を確立するために、社会革命は必要であるにしても、ガンディのように、非暴力・不服従を主張しはじめていたロマン・ロランなどの協力もあったものと思われる。こうして、国際ペンの設立の動きが徐々にかためられていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com